

「日本写真保存センター」調査活動報告(24)

戦後の荒廃した社会から経済成長期の写真界へ

松本 徳彦 (副会長)

文化庁委嘱による「日本写真保存センター」の写真原板の収集状況と保存作業の報告書は JPS のホームページで閲覧でき、データベースからは収集画像を閲覧することができます。

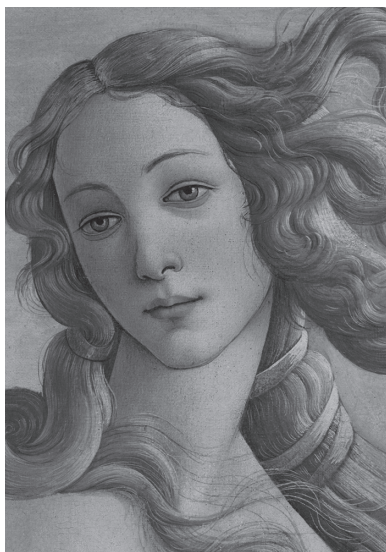
イタリア美術写真の第一人者

岡村 崔 (1927 ~ 2014)

アルピニストから美術家へ

イタリアは美術と音楽の国とも言われ、多くの観光客が季節を問わず訪れ、ローマ、フィレンツェをはじめ美を堪能する人たちが溢れかえっている。岡村崔さんは1927(昭和2)年東京吉祥寺で生まれ、5歳のとき父母の出身地静岡の遠州相良で少年期を過ごす。旧制静岡中学に入学。この頃から山の魅力にとりつかれ登山を始める。とくに冬山の厳しい美しさにカメラを向けるようになる。空襲が収まった戦後の食糧難の1948(昭和23)年、日本大学理工学部建築学科に入学。アルピニストとして名をはせ1959(昭和34)年日本代表として、スイスの名峰シャモニーの国際大会に参加。ヨーロッパに旅することが増え、街まちの古い建築物や美術品を見聞する機会に恵まれ、中世の建造物や美術品に関心が深まって行く。1965(昭和40)年イタリアに渡り、ローマに居を構え、ヨーロッパ各地の教会や美術館などに飾られている美術品を撮影するようになる。

美術品の撮影には文化関係の役所や所有者などの許諾をとるのは大変で、複雑な手続きや許諾を得るまでの時間と苦労は並大抵ではない。写真の技術は勿論のこと写真を使用する出版社や執筆者などの実力と信用も大事で、すべてが整って初めて許諾が得られるという面倒な仕事が付きまわっていた。世界遺産とも言える名画や彫刻、壁画などの撮影には、観光客などのいない時間帯に、照明装置などをセットして要領よく撮らないと良い結果が得

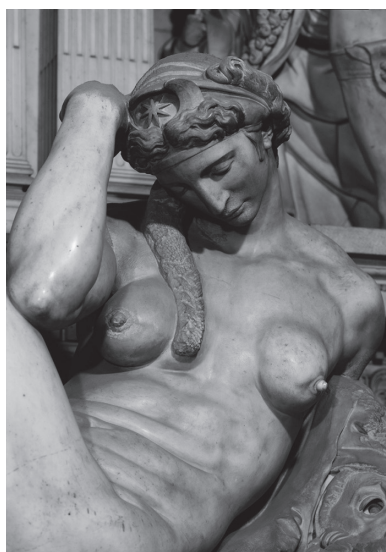


ボッティチェリの1485～86年頃のテンペラ画「ヴィーナスの誕生」の頭部 (撮影：岡村 崔)

られない。その結果を見て次の許可が出るような厳しさがあって、大型カメラを自由に操れるような腕前と忍耐強さが要求される。そうした苦労があるからこそ、出来上がった写真を見て感動は勿論のこと感激もひとしおである。

岡村真弓さんから「主人が長年にわたって撮り続けてきたイタリア美術の写真原板を寄贈したいので見に来て下さい。」との連絡を受ける。静岡の駿府城の北側、閑静な住宅地に佇むご自宅を尋ねる。10数畳はある書斎には所狭しと、内外の美術関係の豪華本が本棚にびっしりと詰まっていた。岡村さん撮影の日本で出版された美術書や外国語の美術書もあって、さすが美術写真の第一人者を思わせる雰囲気伝わってくる。ソファを挟んで背には金属製のロッカーが、ここには4×5インチから8×10の写真原板が入ったkodakの黄色い箱が納められていた。そこから数点のフィルムを拝見する。ラファエロやミケランジェロといった有名な画家たちの作品を撮ったフィルムが入っていた。どれも名画の全画面であったり、部分であったりと丁寧な仕事ぶりが伝わってくる。絵画ばかりではない。彫刻作品も数多くある。教会の壁画など美術書で見たことのあるイタリア美術の粋がいっぱいだ。ダヴィンチも、フラ・アンジェリコ、ティティアーノなど名品ばかりが。これらを真弓夫人が整理されたインデックスとともに、寄贈していただくことになった。

ヴァチカン
のシステリーナ
礼拝堂のミケランジェロ
の天井画やラファエロの
壁画など、誰もが
知っている名品を
撮影した原板はいず



ミケランジェロの「メディチ家のジュリアーノの墓碑」サン・ロレンツォ教会 (撮影：岡村 崔)

れも貴重なものばかり、フィレンツェのメディチ家所蔵の美術品など切りが無い。話には聞いていたが、これほど大量のしかも二度と撮影許可が得られない貴重な写真原板もあるという。遺跡や遺構など学術的にも貴重なものまでを下さるとのこと。ありがたいことだ。写真原板のメタデータ(作者名、作品名、制作年、所蔵館名から掲載書籍名など)夫人がすべて日本語と英文でタイプした資料付きである。これらを整理が済み次第、順次寄贈されるという。ともかくこれは美術の教科書に匹敵する内容である。

ここで名品の一部を誌上で紹介しよう。

ボッティチェリの1485～86年頃のテンペラ画「ヴィーナスの誕生」の頭部。海の泡から生まれた裸身のヴィーナスが、大きな帆立貝に乗って海辺に着いたところという、この部分、“風になびく金髪の乱れ、一抹の憂愁をたたえた夢みるような顔”ボッティチェリ芸術の精髓を見る。

ミケランジェロの「メディチ家のジュリアーノの墓碑」サン・ロレンツォ教会。

フラ・アンジェリコの「エジプトへの逃避」などの名品も見ることができる。イタリア美術の教育的な・ルネッサンス期の作品など名品揃いである。

岡村さんの真価を極めたのがヴァチカンの「システイーナ礼拝堂のミケランジェロの天井画」であるが、この作品の権利は日本テレビにある。

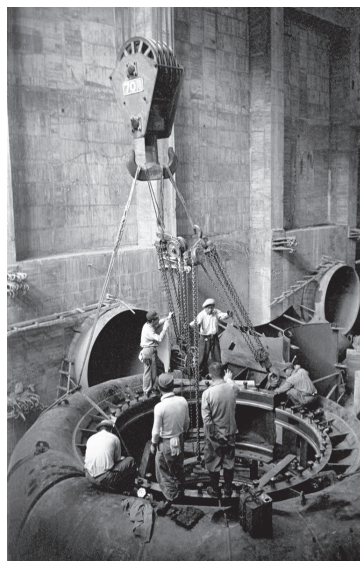
記録に徹した写真家

山崎治雄 (1908～1987)

敗戦の混乱が続く岡山市の戦後復興事業の柱とされたのが県営旭川ダムの建設であった。当時の知事や議会にとってこの大事業は県政始まって以来の大規模事業と位置づけられ、県の「100年の大計」とまで言われるものであった。洪水の防除、灌漑、工業用水の確保と電源開発を行う多目的ダムの建設であった。当時の新聞にはアメリカテネシー州の河川流域開発公社(TVA)の総合開発事業を手本にした「岡山のTVA」と

して報じられていた。

1908(明治41)年12月、岡山市内で青果業を営む家に、長男として生まれた山崎治雄は、内山下尋常高等小学校を卒業し、進学を希望したが、父から家業を継ぐのに学問はいらないと反対され進学を断念。20歳の頃、肺浸潤で療



「水力発電所タービンの設置工事」
1952年頃 (撮影：山崎治雄)

養中、病氣見舞いにきた親戚から「イーストマンコダックのF77」というボックスカメラを貰い、津山線の汽車を写したのが始まりであった。現像を頼んだカメラ屋の店主が出来映えに感心し、岡山のアマチュアカメラクラブの「岡山おもしろした会」に推薦してくれ入会する。本格的に作品作りに励む。岡山には石津良介が主宰する「写真ト影の会」がありこれに参加。35(昭和10)年写真雑誌に初入選。38年には『写真サロン』に「影と光り」が準特選となり、その後も各カメラ雑誌の月例で入選、入賞し招待作家になる。

石津や植田正治、緑川洋一らが活動していた中国写真家集団に40(昭和15)年に入会。翌年招集により満州黒竜江へ赴任するが心臓病で帰国。以降、岡山市内の変電所に経理係として勤務。

敗戦後は、石津とアマチュアカラブの審査員を務め、50(昭和25)年着工されたばかりの旭川ダム建設と住民の立ち退き離散の過程を、ダム完成の54年まで記録し続け、先駆的ドキュメンタリー・プロジェクトとして評価されるが、未公表のまま今日に至っている。

2016(平成28)年10月、山崎治雄の写真記録を保存顕彰する会編による文庫本『写真家山崎治雄の仕事』の発行を機に遺族や関係者から旭川ダム関係の写真原板約900本が保存センターに寄贈された。

写真原板には、旭川の源流から岡山市内を経て児島湾に至るそれぞれの地で撮られた人々の日常生活から、水害で冠水した様子、早魃で干上がった池、干拓地の水不足(塩害)、用水路、水門、児島湾干拓事業と水島の火力発電所、三井造船所、オート三輪車工場など、日本経済の発展過程を淡々と撮影されている。ダム建設で離村する人たち、水没した墓地など負の遺産も含めての記録が残されている。



「田んぼとお別れ」旭川ダムの発電所工事 1954年頃 (撮影：山崎治雄)